

2022. 5. 8. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書 11 章 27～33 節
『何の権威で？』

本日の聖書の箇所は、前回学びました 15～19 節の神殿肅清の記事に本来は直結していました。ですから、19 節でイエス一行は「都の外へ」出て、本日の 27 節で「またエルサレムに来た」と記されます。そして、そればかりでなく 28 節で「何の権威で、このようなことをしているのか」と祭司長たちはイエスを詰問します。まさに「このような」というのは神殿肅清の事を指しているのです。

マルコはこのエルサレムをイエスの敵対者、つまり祭司長・律法学者・長老・ファリサイ派・サドカイ派・ヘロデ派などと生死にかかわる対決の場として描き始めます。

先の質問は「何の権威」で、そして「だれが」そんな権威を与えたのかという問いです。18 節で祭司長たちはイエスを「どのようにして殺そうか」と謀っていたというくらいですから、この問いは所謂「罠」だったのです。

それに対してイエスはヨハネのバプテスマは天からのものか人からのものかと問い直されます。ここでマルコが強調するのは、イエスの時代に絶大な人気を誇っていたバプテスマのヨハネ理解でした。彼が「水と霊」とによる洗礼という全く新しい方法によって、それまで慣例化した割礼しかなかったユダヤ教に問題提起をしたのです。

けれどもユダヤ教指導者達にとってヨハネなどハナから問題視していません。しかし、民衆は預言者だと信じていました。

ここでマルコが指摘する決定的な事は、ユダヤ教指導者と民衆の間にはどうしようもなく埋めようもない隔たりがすでにあったということなのです。

祭司長らは「何の権威で」と問います。それは彼らのヨハネ理解と同じなのです。ですからイエスは民衆を惑わす煽動者でしかないのです。

ユダヤ教指導者達にとっての「権威」とは権力・地位・金です。ですからイエス、つまりマルコの時代の初代教会にこの問いを発したのも現代風に言えば「おまえのスポンサーは誰か」ということです。もし「神である」などと答えようものなら不敬罪で死刑です。

もともとユダヤ教は上から下へというピラミッド型の構造社会です。それゆえ指導者にとって権威は力です。緊張、恐怖、重圧を伴う圧倒的な力です。だから反対に彼らは民衆のクーデターを恐れてイエスの問いに答えられなかったのです。そんな権威に生きる者が他の集団を潰そうとする時、真っ先に集団の権威を叩けば良いと考えるのは当然です。

しかし、初代教会は最初からピラミッド型の構造社会に属していません。むしろ構造社会から逸脱した人々の集まりでした。そんな初代教会に権威の所在を突きつけても、そんなものは実のところ存在しないのです。ですから、マルコはイエスを通して答えさせないのです。

権威とはいわば優しさなのかと思うのです。人の心を暖め、生きる意欲を起こさせ、その優しさの一端に触れさえすれば、人は安心し、感謝し、更にその優しさに従わざるを得ない思いを抱くでしょう。権威とは本来そういうものです。

初代教会の日常はユダヤ教指導者の日常とは真逆でした。看護や治療、慰めや励まし、育みや養いの中で彼ら・彼女らが権威としたものは、まさしく孤独な魂に寄り添われるキリスト・イエスであったということなのです。